

感じたのは時間の足りなさであり、これは翻訳に時間を労したのもあると思うが、やはりもともとのスケジュールもかなりきつかったのではと思う。

日本人として思ったのはやはり過去のことを知らなさ、考えなさすぎると思った。これは私の世代においては顕著であり中国の教育を見て見直すべきだと思った。互いに知り合わなければ溝は深まるだけだと思う。タブー視する気持ちもわかるがいつまでも逃げている場合でもない。出来れば生き証人の方々が御存命の間に二次大戦の傷の清算を終わらせることは出来るのだろうかという疑問も浮かんだ。幼少からの教育で戦争を知らない日本人と戦争に関して真の意味で和解できる国なんてあるのだろうか。また他国での和解というのがどれほどの意味を持っているのかということにも興味が湧いた。

感想

菅原悠治（立命館大学経済学部）

参加这次活动我开始明白了一点：通过观察别的国家可以让自己明白自己所站的立场。可能也是因为没有确定自己的立场、没有自己的信念的缘故，通过这次活动，我开始确认现在的自己。

我是第一次参加工作坊。但从较少人数慢慢到和全体成员一起，我很快就适应了这个过程。另外，活动外和大家的接触也给我带来很大的影响。而至于中日两国语言间的翻译方面，我认为还有改善的余地。长时间听我听不懂的语言，毕竟还是会疲惫的。最大的感觉还是时间太紧。当然仅仅翻译就花费了不少时间，但原本所做的活动计划可能还是有些过于紧张。

而作为日本人，我也反省了自己对过去历史的无知，并且自己从没有认真思考过历史问题。这一现象在我同龄的人中很普遍，这次看到中国的教育情况之后让我觉得真的应该反省。如果相互不够了解，只会导致双方的沟壑越来越深。我可以理解将这些问题视为禁忌的人的心情，但是不应该一直逃避下去。但有一瞬间，我的脑海中又不禁浮现出这样的疑问：现在还活着的证人能不能在有生之年治愈二战给他们造成的伤痕呢？另外，我也开始对以下问题产生了兴趣：从小受到教育中就避开了战争内容的日本人究竟能否真正理解战争的意义呢？日本能和

別国和解吗？ 与他国和解对于日本又有何种意义呢？

11

“国際セミナー「南京を思い起こす 2009」” を振り返って

匿名

今回のセミナーに参加する前の日本にいるとき、私の中には、未知の世界で何かを得たいという期待と、私のような勉強不足なものが行っても大丈夫なのかという不安があった。今、セミナーを終え再び日本に帰ってきてみると、私の中には、その不安とは裏腹に安らかな気持ちが続いている。私がこのような気持ちになれたのは、日本と中国にとって歴史的に大きな意味をもつ南京大虐殺があった地に訪れ、その地でワークを行い、その中で中国の方々との交流をするという体験ができたからだと思う。さらに、そのワークの中でアルマンドが私たちのこころの扉をやさしく開いてくれたからだと思う。

私にとって今回のセミナーで得られたことは、まず、南京大虐殺という日本と中国にとっての大きな傷跡を見つめることができたことである。これまで、私は、この歴史事実から目を背けていた。これまであまり詳しく教えてもらうことがなかったということもあるが、自分からどのような悲惨な出来事があったのかを知ろうともしなかった。けれども、私自身が日本人として生きていく限り、この事実からは目を離すことはできない。このような残虐性を秘めた私であることを自ら自覚していく必要がある。そのためには、過去の悲惨な出来事を覆い隠すのではなく、しっかりと見つめていかなければならないと感じた。

次に、中国の方たちとの交流ができたということも、私にとって大きな収穫であった。今回のセミナーでは、中国という地で、中国の方と互いを理解し合えるような時間を多くもてた。このように、中国の方たちと歴史的な事実を踏まえた上で、人間同士としての交流をもてたことは、私自身の中に新たな広がりが出てきたように思う。日本にいたままで、中国の方は日本を恨んでいるに違いないという勝手な思い込みのまましていると、私の中にこのような広がりや生